



Title	他人に対する恐怖：澤村伊智の「ひとつち」における、異なる「言葉」「習慣」そして「形」
Author(s)	村上スミス, アンドリュー
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 33-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77039
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

他人に対する恐怖

— 澤村伊智の「ひとんち」における、異なる「言葉」「習慣」そして「形」—

村上スミス・アンドリュース

1. はじめに

澤村伊智のホラー短編小説「ひとんち」において、東京在住と思われる女性三人の会話の中で、娘（小学生）のクラスに「ボケ」「殺すぞ」などという乱暴な言葉づかいをする男の子がいると一人の女性が言い、もう一人の女性が、「(その子が) 関西出身とか？」と憶測する場面がある（16ページ）。その後の会話に、どうやらそうではなく、親の育て方に問題があるということに落ち着くのだが、関西の読者は、自らが大阪府出身で、他の作品¹の会話文には関西弁を使用する作者の澤村氏が「ひとんち」においてはこのように（一部の）東京人の価値観ないしは偏見を再現・再生産していることに違和感を覚えるであろう。

一般の読者（というものがあるとすれば）からして、関西の読者が覚えるこの違和感是一部の読者の特殊な背景から来る個人的な感想であり、取るに足りないものかもしれない。しかし、「ひとんち」では、主人公が自分と他の登場人物とを比べて感じる「違和感」がこの短編の「恐怖」への伏線になっており、関西の読者が上記の場面で感じる違和感が主人公の違和感の裏返しと考えていいとだろう。

「ネタばれ」になるが、「ひとんち」の恐怖は「異形」に対する恐怖である。主人公の歩美、友人の恵（けい）とその娘の怜が友人の香織の家を訪れて、二階に病気にかかった「ワンちゃん」が二匹閉じ込められていると香織に聞かされる。だが、小説の山場では、歩美、恵、怜が見て恐怖におののくのは犬ではなく、暗い部屋の中に廊下からかすかに差し込む光にぼんやりと浮かび上がる、香織が生んだという「異形」の子ども二人である。この「人間の異なる形」に対する恐怖を掻き立てる場面は確かにインパクトがあるけれど、この短編は他のJホラー作品同様、衝撃的な暴力や血みどろの描写によって恐怖をもたらすのではなく、時間をかけて不気味な雰囲気をつくって読者を恐怖へと導いていく。山場での描写は10行にも満たないが、不気味な雰囲気はそれまでの流れで準備されていた。具体的には、主人公が他人の階級や背景、習慣や食べる物、そして言葉が自分とは異なる事実次々と直面し気づくことにより、違和感や不気味さが段々と増し、最後の恐怖が仄めかされ用意される。「ひとんち」のこのような「ホラーのレトリック」を解明するために、以下にこの短編の展開を詳しく見ていく。

2. 他人との差異—階級、言葉、食生活、習慣—

歩美、恵、香織が学生時代にアルバイト先で知り合い、通っている学校、境遇、趣味などがそれぞれ違うけれど気が合い、親しく付き合う。10年経った今、久しぶりに香織の家に来ることになる。「お嬢様大学」に通っていた香織はその後、実業家と結婚して専業主婦になっている。美容系の専門学校に通っていた恵はその後、結婚して娘を授かったが離婚して、今は美容師として働く。そして主人公の歩美は事務職をしていて、未婚である。10年前の友人に再会するにあた

¹ 長編『ぼぎわんが、来る』、短編「夢の行き先」など。

り、歩美が裕福な生活をして広い家に住む香織、離婚したが一度は結婚して子供も授かった恵と自分とを思い比べる場面が冒頭からあり、恵の今の髪型が昔のそれよりも似合うが目じりにしわがある（8 ページ）、香織は昔に比べ服装が落ち着いた雰囲気、肌に張りがある（10 ページ）などと年の取り方についての感想からも、自分と比べていることが分かる。が、昔のことを色々と思い出しながら友人と楽しく話す。

香織が皆に麦茶を出して、歩美が昔、恵が麦茶に砂糖を入れて飲むことを知って「ありえない」とつらく当たったことを思い出し、素直に謝る。そこで香織が恵に砂糖を持ってきてくれるが、これを機に恵が「家の習慣って、結構違うよね」と言い、香織が「ご飯もそうだけど、その家でしか通用しない呼び方があったり——」と受ける（12 ページ）。そこで恵が歩美の家ではリモコンを「ビシビシ」と言っていたことを思い出し指摘する。他の二人に笑われ恥ずかしくなる歩美が、「お嬢様」の香織は「庶民の暮らしが垣間見えて可笑しいんだろうな」と考え（12 ページ）、ここでも「階級」の違いを感じていることが分かる。

だが意外なことに、香織の家にもそのような家族独自の呼び方があり、「おやすみなさい」を「ヤズナサー」と言っていたと言う。そこで歩美が「自分が卑屈になって〔略〕格差や今の境遇を比較していた」ことに気付いて、張り合っていたことを反省する（13 ページ）。だが、他人との違いについての会話がしばらく続く。恵の家でも、娘の怜が「うおしま」というあだ名があるという。「怜ちゃんのシュツとした風貌には似合わない」というギャップを歩美が感じ、そのとき、二階からの音で香織が初めて二匹の「ワンちゃん」がいることを友人に教える（14 ページ）。ここで指摘したいのは、歩美が「ギャップ」（＝違和感）を感じたとたん、二階からの音がして、後で描かれる異形たちの恐怖への伏線となっていることである。

三人の会話がここで、冒頭で触れた言葉遣いの悪いクラスメイトの男の子に及ぶ。男の子の性格は「基本優しい」ので、言葉遣いだけが「ズレてるんだ」（16 ページ）。歩美が内心「ある一点において奇妙だけれど、それ以外は普通。そんな家庭は少なくない。というより、どの家庭もそうかもしれない」と考え（17 ページ）、やはりここも人との違いからくる「違和感」がテーマとなっている。次の話題も香織が高校生のとき、同級生の家があまりに金持ちで、百貨店や老舗が必要なものを家に持ってきてくれるので店に行っただけでなく、同級生が「お店」という概念が理解できなかった（17 ページ）という話で、やはり「ひとんち」と「じぶんち」との違いがテーマである。

次に歩美が「食生活の違いって、けっこう深刻だよ」と切り出して、元彼氏が作ったカレーがまずかった話をする（18 ページ）。彼氏が適当に作ったのではなく「おふくろの味」と言われて出されたのは「す、酸っぱかったんだよ、端的に言うと。色もなんか白っぽいし、それに何ていうかこう、ダメっぽいというか、分離してるみたい」と語り、材料については「……ルーじゃなくてカレー粉だった〔略〕他には塩と卵、それからお酢と」「あと錆びた釘」と説明する（19 ページ）。錆びた釘は「黒豆を煮る時の工夫」と彼氏に指摘し、「親をバカにするのか」と喧嘩になり、そのまま別れたことを歩美が明かす。「食生活の違いって、けっこう深刻だ」と言っていた意味が分かる。

次に「香織ちゃんはそういうの無いの？旦那さんと」と聞かれて、香織が「ワンちゃんの餌、お台所に置いてたら、たまに食べちゃうのは嫌かも」と答える（20 ページ）。それはドッグ・フ

ードかと聞かれて香織が「まさか」と答え、「お肉だよ。だいたい豚か鶏。でも味なんか全然付いてないし、安いのだからパサパサだし。それ以前に冷めてるし」そして「ちゃんと作ったローストビーフ」などとは味の区別がつかないのかなと小言を言い、ちょうどその時、また二階から「犬の足音が聞こえ」て、そこで第三章が終わる。

第四章の始めに、歩美が心の中で感想を述べる。すなわち、「共同生活は大変だろうな」と思い、さらに、「別々の家で育った二人が、一つの屋根の下で暮らす。習慣の違い、言葉の違い。基本は同じだからこそ、お互いの差異がことさら目に付いてしまう。当人はそれが普通だ、当たり前だと思っているからこそ、なかなか理解や配慮ができず衝突してしまう」(21 ページ)。そして結婚生活についての感想だったのを展開して、「一緒に暮らしていなくても、たった一度の食事でもどうしようもない溝ができて、ご破算になることさえあるのだ。わたしみたいに」と一般化し自分にも応用する(21 ページ)。ここで主人公や読者が他人との差による違和感ないしは不気味さに充分気付いているのだが、作者がここで恐怖へと急展開するのではなく、不気味さを徐々に増すという方法をとる。歩美が次に考えることで不気味さがとりあえず「保留」になる。すなわち、考えが香織の裕福な生活に戻り、「彼女は「安い」と謙遜していたけれど、わたしが普段買う肉と大差ないのだろうな、[略] 或いはわたしにとって「高級」の部類に入るかもしれない」と、なお他人と自分を比較しているのだが、気持ちがここで違和感や不気味さではなく羨望や競争に傾いている。次の恵と香織とのやり取りも香織の裕福な生活というテーマの延長線上にある。二階から戻ってきた香織が自分の息子の空と恵の娘の怜がテレビゲームを仲良くやっていると言い、恵が「テレビあんの？空君の部屋」と聞き、香織が「きょとんとして「あるよ」と答える(22 ページ)。ここでは歩美の心内が語れることなく、恵と香織との差異が示されている。

その直後に、逆に恵と香織の共通点が会話の中で発見される。香織の夫と恵の元夫が二人とも元自衛官だったという(22 ページ)。この共通点の発見は一見、「ひとと自分との違いによる違和感・不気味さ」というテーマからそれるように見えるけれど、重要なのは、これが恵と香織との共通点でありながら、主人公(読者が感情移入しやすい登場人物)である歩美との差異でもあることである。(同時に読者の多くとの差異でもある。)もう一つの解釈として、作者が「共通点」を持ち出すことにより、上で言及した歩美の「基本は同じだからこそ、お互いの差異がことさら目に付いてしまう」という理論に沿って、共通点をいったん指摘することにより、その後に出てくる差異のインパクトを強くする狙いかも知れない。実際、その後に恵が元夫とその家族について話し出し、「別れた理由の一つが、まさに今までの話そのもの」と言う。これを受けて歩美が「ってことは、元旦那さんがすごくズレてたとか？」と返す(23 ページ)。

3. 「犬」に関することの伏線

それから恵が元夫の両親の家の秘密の部屋と、そこで行われた嫁入りの「儀式」について話し、「ひとんち」との違いが違和感や不気味さを通り越し、いよいよ恐怖へと近づいていくのだが、それについてもう少し後に触れるとして、ここではその話の流れの中に、些細なことのように見えて、実は重要だったと後で気づく言葉のやり取りを見ておこう。

恵が元夫の両親の家を初めて訪れたとき、庭に犬小屋があり、その中で雑種の犬が寝ていたと説明する(24 ページ)。そこで香りが「不思議そうに「そんなのあるんだね」とコメントする。

恵が「そっかそっか、香織ちゃんはずっと室内犬なんだね、実家でも」と香織の質問を自分なりに解釈する。香織がそこで「うん、専用の部屋があったよ」と受けるが、まだ何か理解のズレがあるらしく「あとザッシュって？」とさらに質問する。「今はミックスって言った方がいいかな」と、また香織が質問する理由を自分で考えて適切に決め（「香織がお嬢様育ちで家にはきつと雑種の犬はいなかっただろう」や、「雑種」という言葉の響きは品がない」、など）その理解を元に答えている。香織はさらに「ミックス？」と首を傾げるけれど、恵が離婚した背景について知りたい歩美が「それで、どうなったの？」と恵を促す。上で触れた、香織の夫が「ワンちゃんの餌 [略] たまに食べちゃう」話同様、香織はどうやら「犬」にまつわることで、他の登場人物や読者と理解のズレがあることが仄めかされている。けれど、その場面で歩美が「金持ちは人間が食べる物を犬にやる」などと解釈しそのズレについて追究しなかったように、また、ここでも恵の話が歩美に促されて、香織の犬に関する理解のズレが追及されないままとなる。「違和感」がそのまま保たれ、「不気味さ」に発展するのが先送りされる。

4. 他人の家の謎めいた「儀式」

「犬」に関してはそのように「不気味さ」への発展が先送りになるけれど、恵の話の中に、他人との違いから来る違和感が不気味となり、いよいよ「怖さ」へと発展する。犬のことが短編の核心に関わるのでこの時点では秘めておくけれど、怖い雰囲気作りには努める、というホラー小説的な展開の仕方である。恵が元夫の両親の家を訪れたとき、ある部屋を一つ残して家中を案内され、その部屋は？と聞くと「あんたが嫁入りしたら教える」と言われた（25 ページ）。ここで作者が「恵ちゃんはいつの間にか声を潜めて [略] わたしと香織は必然的に、彼女に顔を近づける」というホラー小説の「演出」を忘れないのだが、恵が結婚してその年が明けて元夫の両親の家を訪れたとき、「お義父さんがその部屋に連れてってくれた」と恵が言い、「中は何にもなかった。家具もないし、床の間とか押入れもなく。裸電球が一個あるだけ [略] でも、扉の向かいの壁いっぱい、鳥居が描いてあったの。真っ黒な鳥居の絵が」と続く（25 ページ）。お義父さんによるとこの部屋は「この家の者だけが使える——ほらぶろ」という部屋で、恵が「何ですかそれ」と尋ねると、お義父さんが「ここに裸で入りなさい、風呂に入ると同じように」と答える（25 ページ）。風呂桶などはなく、服を脱いで「真ん中で座ってるだけでいい」、「それがうちの慣わしだ」と言われて「脱衣カゴっていうの？」を渡され、「したらもう中入るしかないじゃん」と恵は言う（26 ページ）。「終わったら呼ぶから」と言われたので中に入り服を脱ぎ「しゃがんで丸くなって」「長かった。後から考えたら十分くらいだったと思うけど、気持ち的には一時間どころじゃなかったよ」「最初は [略] 鳥居の方向いてたの。 [略] でもやっぱり嫌っていうか、向いてられなくなって。で、途中で反対向いたの。そしたらもっと嫌で。バカみたいだけど、な、何か——来そうな気がして。後ろから、と、鳥居くぐって」と、恵がその時の怖さ、辛さを語る（27 ページ）。「儀式」が終わって「これで家族の一員だ」と元夫とその両親が喜んでいて、それと自分が経験した辛さとのギャップで「アレ？」と思ったと回想する（28 ページ）。そして聞いていた歩美が思いを巡らす。「形だけの風習。今は形だけになった風習。昔はどうだったのだろう。もっと複雑で、意味もはっきりしていたのかもしれない。もっと直接的なことをしていたのかもしれない。嫁を裸にして、部屋に閉じ込めて、黒い鳥居の前で——」と歩美が考え、「頭に浮かびか

けた光景を大急ぎで追い払って」(29 ページ)、歩美が何を想像しているのかそれ以上描写されず、読者の想像に任せる。アメリカのホラー小説の大御所 H.P. ラブクラフトが言うには「人間の感情の中で、何よりも古く、何よりも強烈なのは恐怖である。その中でも、最も古く、最も強烈なのが未知のものに対する恐怖である。」²これが本当であれば、幽霊や怪獣、怖い場面を細かく描写するよりも、読者の想像に任せた方が怖さが増す。しかし一気に恐怖のレベルを上げるのではなく、ここでも恐怖への展開が保留される。上記の引用の直後に、歩美が「恵ちゃん、トーク上手いなあ」と言い、「あからさまに話をズラした」(29 ページ)とある。

そこで恵が離婚した背景、という本来の話題に戻り、元夫やその両親と様々な軋轢があったことを話す。子供がなかなかできずプレッシャーをかけられて、やっと妊娠したら元夫が風疹にかかり、恵にも移したという。それで「散々迷ったけど」中絶することを選択したという(30 ページ)。これは妊婦が風疹に罹ると「赤ちゃんが風疹ウイルスに感染してしまい、難聴、心疾患、白内障、緑内障、精神や身体の発達の遅れなどの障がいをもった赤ちゃんが生まれる頻度が高く」なる(西郡)ことが背景にあるけれど、香織が「産んだらよかったのに」と言う。そして、脈略もなく「飼うのは大変だけど、可愛いよ、ワンちゃん」と続き、また「ととん、と天井から音がした。」(31 ページ)。第二章、第三章同様、第四章もこのように、二階からの犬の音で終わる。

5. コミュニケーション不成立からくる不気味さ

それから第五章が始まるのだが、いよいよこのホラー短編の大詰めへと向かう。まずは上で引用した、香織の不可解なせりふを、他の二人が理解しようと努める。最初に恵が「はっ?何の話?」「何で急に犬の話になんの?」と尋ねる。これに対して香織が「だって犬の話でしょ?」と聞き、さらに、「一応なんだけど……犬って、ワンちゃんのことだよ」と続ける(31 ページ)。次に歩美が香織に「恵ちゃんが訊いているのは、子どもを産む生まないの話してたのに、何で急に犬が——ワンちゃんが出てくるのかってこと」。これも香織がどうして聞かれているのか解らない様子で「えっ、でも」「妊娠中に病気して、検査したら問題が見つかって、って言ってたよね?」と確かめ、「だったら——えっ、それって」「ワンちゃんだよ」と、逆に聞いてくる(32 ページ)。これだけやり取りがあっても、双方の理解が平行しており、コミュニケーションが成立しないという、自分と他人との究極の差異が生まれる。いよいよ不気味な雰囲気が増し、それを示すかのように、ここで「また二階で音が鳴った。今度は何かを擦るような、引きずるような音」と、最後の衝撃的な場面への伏線となっている。

その後も会話が続く、双方がコミュニケーションを成立させようと努める。少し長い引用になるが、登場人物のセリフのみをト書き風に抜き取ると以下のような会話になる(32~33 ページ)。

恵「……ごめん、ちょっと分かんないや」

香織「どうして?」「元旦那さんのご実家でも、飼ってたんだよね? [略]」

恵「それはだから犬の話だよ。いぬ」「毛が生えて尻尾があって、ワンワン鳴く動物のこと。首輪付けて。香織ちゃんの家でも飼ってたでしょ」

² “The oldest and strongest emotion of mankind is fear, and the oldest and strongest kind of fear is fear of the unknown.” (Supernatural Horror in Literature 『文学における超自然の恐怖』より、日本語訳は金井公平(1999年)『西洋文学における超自然: H. P. ラブクラフトとゴシック小説』『明治大学人文科学研究紀要』第44巻、明治大学人文科学研究所、93-105頁。ウィキペディア参照。)

香織「うん、でも」「それはドーベルマンとラブラドルで」

恵「それが犬だって言ってるの」

香織「あー」「そういうことか。」

恵「分かった？」

香織「うんうん」「二人の言う犬って、比喻の方だったんだね」

歩美「ひゅ？」

香織「そう」「テレビでもよく言ってるよね。ドーベルマンなんかのことを全部まとめて犬とかワンちゃんって。[略]種類が多くて大変だから。あ、ちょっと似てるからかな？手を使わないで食べるとか、あとたまに嘔んだりもするしね」

この辺りで香織が言っている意味が歩美たち、そして読者にもほぼ不明である。このように意思疎通が完全に阻まれたちょうどその時、「天井からまた音が聞こえる。ととん、とんとん、ずっずっ」(33 ページ)。もはや音の原因が「犬」や「足音」という説明がなく、擬音語が強調されて、「未知に対する恐怖」を仄めかす。それから会話が以下のように続く(33～35 ページ)。

歩美「……ええっと」「一応訊くけど、香織の実家は、ドーベルマン飼ってたんだよね」

香織「うん。あとラブラドルレトリバー。一匹ずつ」

歩美「そ、それは何処で飼ってたのかな。場所っていうか」

香織「え？庭だけ」

歩美「じゃあ、それとは別にその、い、犬を、飼ってたの？室内で。専用の部屋で」

香織「うん」

歩美「わ、ワンちゃんを」

香織「そうだよ」「五匹」

歩美「ちょ、ちょっと待って」「話ちょっとズレるけど、そもそもワンちゃんを購入したのは、その、ご両親だよな？」

香織「購入？」

歩美「あつ、じゃあアレか、誰かから譲り受けたとか」

香織「譲る？」「そんな酷いこと、するわけないでしょ」「ワンちゃんはお母さんが、自分——」

上で見てきたように、歩美たちと香織との間に、どうやら「犬」の概念の違いが原因でコミュニケーションが成立しない。香織の最後のせりふでようやく香織がもっている概念が明かされそうだが、香織の言葉が途中で途切れる。なぜかというと「どすん、と大きな音がした」と、または二階からの音で遮られたためである。そして「上からかすかに、カチ、と金属の鳴るような音がした。とん、とん、と軽い音が続く。足音だ」。香織が二階へと向かうところで「甲高い悲鳴が階段からリビングを貫いた」(35 ページ)。そこで第五章が終わる。

6. 衝撃的なクライマックス

今まで見てきたように、登場人物や読者が感じる違和感、不気味さ、怖さの原因が「他人との差異」、「犬にまつわる謎」、そして「二階からの音」である。最後の第六章では、この三つの線が

いよいよ交差して、衝撃的な場面で結ばれる。この論文の一番始めに述べたように、怜、恵、歩美が二階の暗い部屋でおぼろげに浮かび上がる、香織が生んだという奇形な子ども―「ワンちゃん」を目の当たりにする場面である。時系列的には第五章末尾の、怜の「甲高い悲鳴」の直後にその場面があるはずだが、第六章の語りは、歩美たちが香織の家から逃げるようにして飛び出して、電車に乗って帰ろうとしている時点からの回想の形をとっている。作者が第五章の最後の悲鳴で、何か怖いことがあることを読者に知らせ、その怖い場面を今しばらく遅らせるという、サスペンスをじりじり上げるホラー小説的な方法を巧みに使っている。電車の中で歩美が携帯電話に香織から着信が3件、留守番電話も録音されていることに気づき、消去して、「少し迷ってから、香織の番号を着信拒否」にする（36ページ）。そして衝撃的な光景を思い出す。

「真上の部屋のドアは半開きになっていた。

中は暗かった。電気が点いていなかった。それでも何かがいるのは分かった。二匹、いや二人いたのも分かった。部屋を這う音のはっきり聞こえたし、気配もした。あばら骨が浮いた、白くて長い胴も見えた。

ずるる、と聞こえたのは、唾か何かを吸る音だろうか。

折れ曲がった木の枝みたいに見えたのは、手だろうか。足だろうか。

潰れたトマトみたいに見えたのは。

踏みつけたケーキみたいに見えたのは。」（36～37ページ）

部屋の暗さでよくは見えないことを伝えるために用いられている「…みたいな」「…は…だろうか」という表現は読者の想像も働かせ、ラブクラフトの言う「未知のものに対する恐怖」を掻き立てる。同時に、「異形」に対する恐怖も呼び覚ます。このような、未知のものではないものに対する恐怖について考えれば、例えば以下のように分類できると考えられる。

- ①人間に近いが人間でないもの（幽霊、鬼、天狗や河童、トロールや巨人）に対する恐怖
- ②形は人間でも中身や本質が異なるもの（吸血鬼、ゾンビ、あるいは殺人鬼）に対する恐怖
- ③人間（のはず）だが人間の本来の姿と異なるものに対する恐怖

「異形」の恐怖は上記③に当たる。純粹な（？）異形以外にも、姿は普通だけれど、姿勢や動作が異様なときも、恐怖が掻き立てられる。例えば映画では、『エクソシスト』の首が360度回転する少女や、『エミリー・ローズ』では悪魔に取りつかれた女の子が床で体を捻じ曲げていて、それをロー・アングルのカメラでとらえる映像や、『リング』の貞子が井戸から這い出てくる時の異様な姿勢や動作である。「ひとつち」でも、上で触れた、第五章の終わりに怜の叫び声が鳴り響く直前に、香織が二階の音に上を向くとき、「香織は[略]天井を眺めていた。顎から喉にかけての曲線が、異様にわたしの目に焼き付く」（35ページ）というように描写されていた。そして実は香織の子どもたちである異形たちの描写は、上で指摘したように、読者の想像力を動員して怖さを増すとともに、人間的な要素（あばら骨、胴、手、足）と非人間的な要素（木の枝、潰れたトマト、踏みつけられたケーキ）をないまぜにして「異形」を形成している。

7. 結論

「ひとつち」の異形たちは「ワンちゃん」と呼ばれ、恐怖の対象として巧みに描かれている。だが、所詮先天性の欠損や異常を持つ人間なはずである。身体障害者への恐怖や偏見に満ちたま

なごしを変え、差別をなくして社会の一員として暖かく受け入れるという、昨今の社会の流れに鑑み、主人公や読者が感じる恐怖は、すでに「時代遅れ」かも知れない。障害者に対して、仮にそのような恐怖や嫌悪を感じたとしても、それを抑え、他の感情に変えるように努めるのが現代においてやらなければならないことであろう。障害者のみならず、他の人種、国籍、宗教、自分と異なる言葉、習慣、考え方をもち人への理解に努め、受け入れるのが誰でもが快く参加できる安全・安心社会の実現のためにしなければならない。しかし、恐怖が「何よりも古く、何よりも強烈な」感情なら、人間の根底を成す基本的な感情の一つに他ならない。抑えようとしても、恐怖、嫌悪、違和感が沸き起こる。「ひとつち」が示すように、他人と自分が基本的に同じ人間だと思っけていても、小さな差異—違う階級、言葉、食物、習慣、考え方が目に付き、意識され、小さな違和感から不気味さ、さらに怖さへと発展していくことがある。「単なる」ホラー小説に見えても、「ひとつち」がそういったメッセージ性を秘めている。

恐怖その他の強い感情—怒り、欲望、喜び、悲しみ—に左右されないよう努力するのが文明社会の一員としての義務であろう。しかし、そういった感情が沸き起こるのが人間の基本的な・生理的な現象であると受け入れて初めて抑えたり制御したりすることが出来るのではないだろうか。最近の多文化社会理論では、違う人種、宗教、言語、文化の人を理解しようとしても挫折することが多いことから、根本的に理解しようとしなく、違いを違いとして認め合い、受け入れる方が真の多文化社会の実現に寄与する、という考え方がある。理解できない違いを認め受け入れることの難しさを、香織の家から逃げて電話番号を着信拒否にする歩美が物語っている。

8. 最後の恐怖

上で見たようなメッセージを秘める「ひとつち」の作者が、最後にもう一度、読者を巧みに不気味な気持ちにさせずにおかない。短編の最後の場面は以下の通りである。

「アパートの鍵を開け、靴を脱ぐと同時に、わたしはそのまま床に倒れ込んだ。身体が動かない。疲れている。でも頭は冴えている。

奥からガサガサと鳴る音がした。どさり、と床に落ちる音がする。

「……ミイくん」

わたしは呼んだ。

ミイくんは「あがあ」と一声鳴いて、ずるずるとわたしのところへ這い寄った。

ボサボサの頭をそっと撫でる。髭の生えた顎をくすぐる。

ミイくんは嬉しそうに喉を鳴らす。

仲良しだった友人とも、男とも、たった一つのズレでおかしなことになる。関係が終わってしまう。

もうこりごりだ。わたしには猫がいればいい。

ミイくんと一緒に、普通に暮らすだけで充分だ。」(38 ページ)

歩美が床に横になっているところに「ガサガサ」、「どさり」と音がする。読者が当然、香織の家での衝撃的な山場への準備として再三語られた「二階からの音」を思い出す。しかもその次に「ずるずる」、「這う」という、衝撃的な場面でも使われた単語を用いている。最後にやっと「猫」という言葉が出てくるのだが、ここでも、読者が思い起こすのは「猫—犬」という対照ないしは

対称であろう。香織が「ワンちゃん」と呼んでいたのは恐ろしい異形だったなら、歩美が「猫」と呼ぶのはもしかしたら…。このような考えはやはり明示されず読者の想像に過ぎない。「猫」という言葉を読んで、その前の「髭」、「喉を鳴らす」という表現と整合性を持たせて「ああ、猫だった」と理解しようと努める。しかし、これは歩美がアパートに帰る途中に考えていたこととおなじである。つまり、香織を思い出しながら、「香織の家系では、以前からああやっていたのだろうか。／どこかで誰かが気付かなかっただろうか。いや、これは愚問だ。どこの家でも同じだ。何かが決定的にズレていても、家の中で通じるなら気付かない。[略] そういうものだと一瞬で片付けて。あるいは世間との辻褄（つじつま）を強引に合わせて」（38 ページ）。ここで読者が「猫だった」という整合性を持たせようとするのがまさに「世間との辻褄を強引に合わせて」いるかも知れない。しかし、「もしかして…」という考えの余韻が残る。

「ひとつち」をここまで読んできて、主人公である歩美の視点から、歩美の価値観で物語を追ってきた読者にとって、ここで「もしかして」と突然浮かぶ考えで歩美のことが急に怖くなる。「同じ」だと思って感情移入して共感していた歩美が突然、読者と「違う」かも知れない、ということになる。「ひとつち」では、他人との違いが最後の最後まで不気味で怖い。

参考文献

ウィキペディア「ハワード・フィリップス・ラヴクラフト」（2020年3月28日参照）

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ハワード・フィリップス・ラヴクラフト>

澤村伊智（2016年）「ひとつち」『ひとつち』（光文社、2019年）7～38 ページ

西郡秀和「風疹が妊婦に与える影響について」東北大学大学院医学系研究科・医学部ホームページ（2020年3月28日参照）https://www.med.tohoku.ac.jp/feature/pages/topics_26.html